

# 北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第440号 平成24年11月21日

## 採用試験（選択と覚悟）

去る11月9日、札幌市内で、協同出版主催、北海道教育大学、読売新聞北海道支社の協力により「2012教員採用試験シンポジウム in 札幌」が開催されました。

その概要が、11月16日付読売新聞に掲載されましたので、ご覧になった方もいらっしゃると思います。その記事によると、今回のシンポジウムでは、教員採用試験の傾向や対策、最新の教育二週を巡る講演、合格者の体験発表などが行われたとあります。

先般、道教委が今年の採用試験の結果を発表しましたが、その結果、教員採用試験の最終合格倍率は5.5倍という状況ですから、道内の公立学校の教員になる為には、依然として狭き門を潜らなければなりません。こうした中で開催されたシンポジウムですから、教員志望の学生が熱心に耳を傾けていたというのも頷けます。

ところで、このシンポジウムでは主催者である小貫協同出版社長が講演をされており、その概要も掲載されています。それによると「東京や大阪では小学校の倍率が2倍くらいのところがあり、今年度も、再募集がある。北海道は、教科によっては倍率が高い。掛け持ち受験をして他の都府県で経験を積み、サクが遡上するように、教職歴を北海道で評価してもらうという選択肢もある。その場合、1次試験はほとんどのところで免除されている。」という内容のお話だったようです。

小貫社長のお話が記述の通りだとすれば、これから教員採用試験を受けようとしている方々に若干誤解を与える可能性が有るように感じますので、私は小貫社長のお話を直接お聞きしていませんし、また、コメントすべき立場ではありませんが、教員採用試験に向けて、私の思うところをあえて述べておきたいと思います。

まず、教員の採用試験はそれぞれの都道府県教育委員会において独自に行っていますので、仮に、他府県で教員をしている者が北海道の教員になりたいと考えた場合には、改めて北海道教育委員会・札幌市教育委員会が実施する採用試験を受け直さなければなりません。なお、例外的な取り扱いとして、高等学校教諭を受験しようとする場合、既に他府県の教員を4年以上経験している者は一般選考の特例（若干名）による出願が可能です。その場合でも1次試験で免除されるのは教養検査だけです。

勿論、面接や模擬授業等の場面では自ずからキャリアの違いが出てくるとは思い

ますが、他府県で教員をしているからといって特別の優遇措置がある訳ではありません。

「北海道の採用試験は厳しいので、合格しやすい府県を選んでそこで教員になり、何年かしたら北海道に採用してもらおう」、そんな都合の良い方法はありません。

どうしても教員になりたいと考えれば、北海道は厳しいので倍率の低い府県を滑り止めに受けるという事は当然あるでしょう。何年か浪人するよりも、一日も早く教職に就きたいと思えば、誰しも考えることです。ただ、申し上げたい事は、仮に滑り止めに受験した府県であっても、そこで合格し教員になったのなら、その府県の子どもの為に腰を据えて全力を尽くすべきで、いずれ北海道に戻るのでは腰掛ですというような姿勢は許されないという事なのです。

かりそめにも、そういう安易な気持ちで他府県の教員採用試験を受けるというのであれば、それは余りにも相手に失礼だと思います。

北海道には、他府県出身者が沢山いらっしゃいます。その中には、地元での採用試験に失敗し、北海道に活路を求めてきた人も少なくありません。しかし彼らは、北海道の子どもの為に頑張ってくれています。

教員を目指す方々がいずれの府県の採用試験を受験しようと、それはそれぞれの選択の結果ですから、何も申し上げません。しかし、選択した以上は、その選択に対しては責任を持つべきではないでしょうか。そして、その責任とは、子どもの為に力を尽くして教育実践を重ねて行く事でしょうか、果たし得ないものだと思っています。

最後に私は、北海道の教員を目指す皆さんに申し上げたいと思います。北海道の教員を目指すなら、厳しい戦いを勝ち抜く為に最善の準備を尽くして欲しいという事です。

先日、北海道師範塾が主催している「教師養成講座」で、今年の採用試験に合格した1期生お2人による体験発表をお聞きしました。それを聞いたとき、お2人の努力は半端なものではありませんでした。恐らく、2期生全員が度肝を抜かれたのではないかと思います。

いずれの府県の採用試験を受けるにせよ、その選択には覚悟が必要です。何故なら、あなた方の行く手には、必ず沢山の子ども達が待っているからであり、その事を片時も忘れてはなりません。(塾頭：吉田 洋一)